



交流プログラムの目的

- 2010年11月のフィリピン訪問交流(詳細は
→http://www.apla.jp/04/timor/timor_110311.pdf)のフォローアップ。
 - ①アルフレッド(ネグロス)とグレッグ(北部ルソン)がそれぞれの現場経験を踏まえて東ティモール・エルメラ県の2つのコミュニティの現状視察。
 - ②2つのコミュニティを代表してフィリピンを訪問したアフォンソとルシオが学んだことを地域で具現化していくためのアドバイスをする。
 - ③上記(①・②)を受けて、コミュニティのメンバーが話し合いをもち、実践につなげる。
- エルメラ県のコーヒー生産者から北部ルソンのグレッグにコーヒー栽培やパーチメント加工に関する技術を伝える。

参加メンバー

フィリピンより

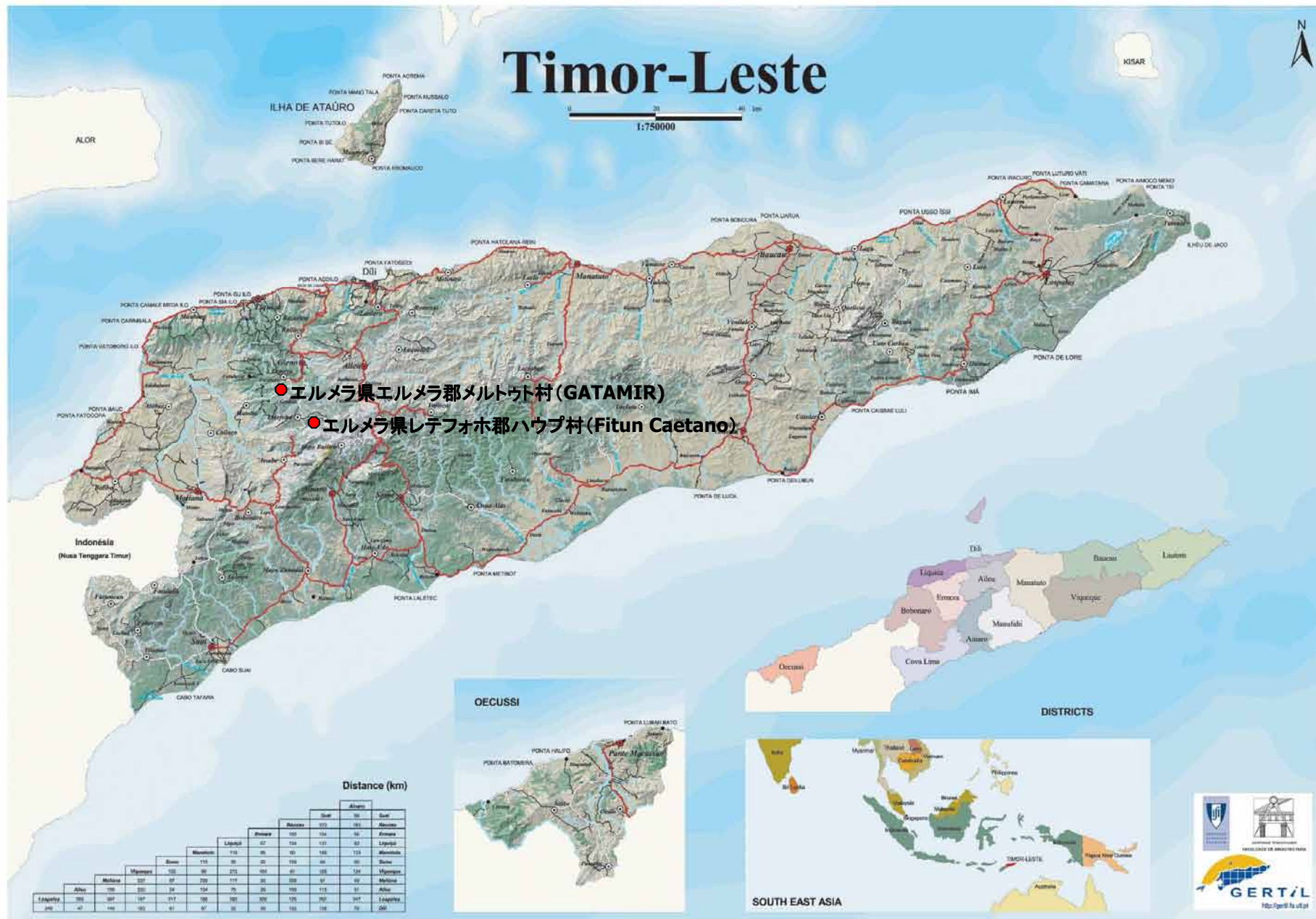
- アルフレッド・ボディオス(右)
カネシゲファーム・ルーラルキャンパス(KF-RC)
- グレッグ・ラシガン(左)
農村のための発展協同組合(CORDEV)、
カヤパ・エコビレッジ協会(KEA)

東ティモールより(コーヒー産地コミュニティ)

- Fitun Caetano(ハウプ村リアモリ集落)
- GATMIR(メルトウト村タタバウリア集落)



エルメラ県にある故FALINTIL司令官コニス・サンタナの墓地にて。



<http://turismotimorleste.com>の地図に情報を追加

Fitun Caetano(ハウプ村リアモリ集落) 訪問



外国からの来客に子どもたちも大集合。
グレッグと一緒に「ハイ、チーズ！」



広大なコーヒープランテーション内に位置するこのコミュニティは、現在まで土地の権利のために闘っている。先祖代々の土地であることを証明する墓地に案内してもらった。フィリピン側からは、ネグロスでの土地闘争や北部ルソンの先住民の闘いなども共有。



↑プランテーション内散策

コミュニティ内の土地の様子や水源などを見て回るメンバーたち。雨季とはいえ、水の豊かさにびっくり。これを乾季に生かすことができれば・・・と頭をひねる。

←メンバー個人の畑でアドバイス

丘陵地で畑を作る際の大事なポイントは、土の流出を防ぐことであり、そのためにはテラスをつくるのが有効。「Aライン」と呼ばれるシンプルな道具をつかって、土地の高さをはかる技術を伝授するアンボさん。いま畑に植わっているのはかぼちゃとキャッサバがメインだけれど、豆類や他の野菜など、多種目栽培するようアドバイスも。



淡水魚の養殖

コミュニティメンバーが力をあわせて造った養殖池を見学。いまはティラピアとコイの2種類を育てているが、今後は稚魚まで自分たちで管理して、定期的な収入につなげたい、とメンバーたち。今回の滞在中にも、池から収獲したばかりの魚をごちそうになった。



デモファームづくり

アフォンソがフィリピンから戻り、さっそくコミュニティでデモファームを開墾。限られた道具で100㎡くらいの荒地を畑にした働きっぷりにアンボもグレッグも脱帽。同時に「家畜を使ったり、道具を改善したりして、みんなの労働力を有効につかわないと、持続可能ではないよね」とアドバイスも。まずは、収穫までの時間が短いカンコン(空芯菜)の栽培と、陸稲の試験栽培をはじめた。



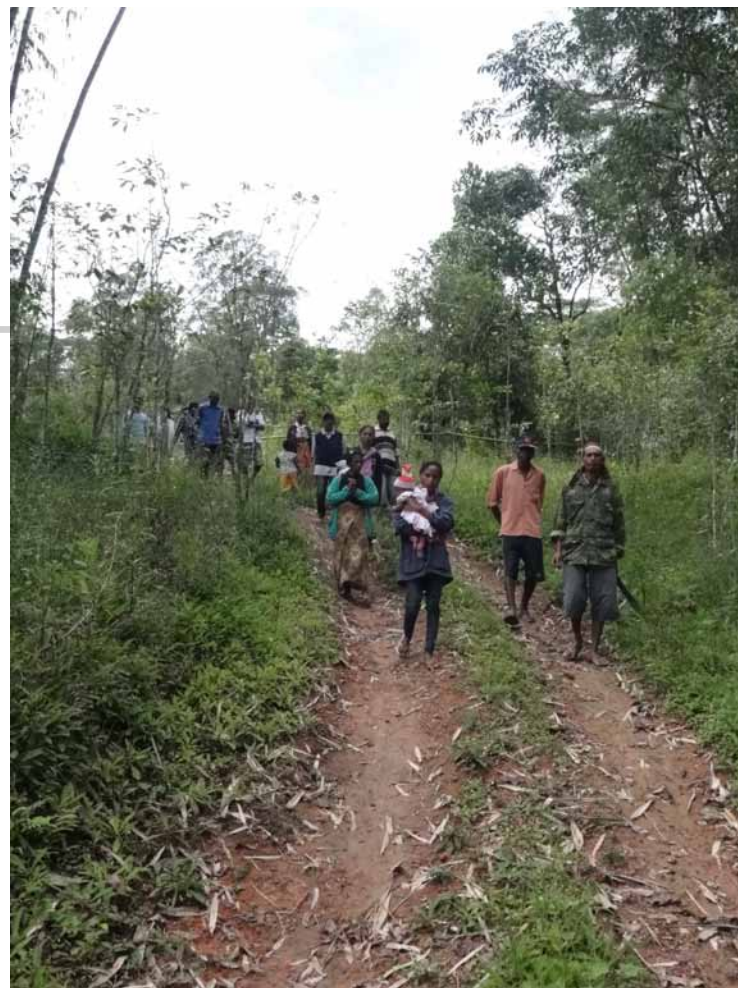
人や動物が生きていくのに大切な栄養素の話にはじまり、それを自分たちで確保していく「コミュニティ内での自給」の重要性について話された。途中からは女性たちも続々と参加し、活発な質疑応答も。



GATAMIR(メルトウト村タタバウリア集落) 訪問

タイスと呼ばれる織物をお客さんの首にかけるのは、東ティモールの伝統的な歓迎セレモニー。グレッグとアンボ、大喜び。



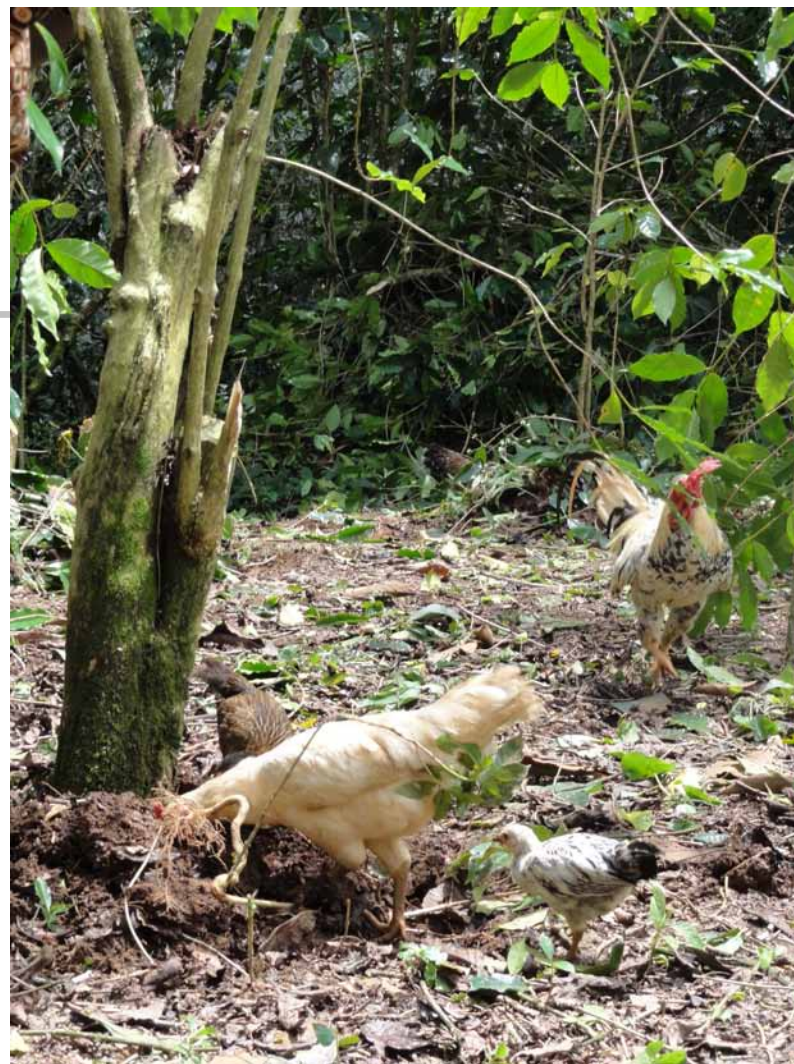


コミュニティ内を散策

グレッグが土地の様子を見てアドバイス。「この部分はぎゅっと押し固められているのがわかるよね？これを耕すのはとても労力がかかるから、放牧などに活用したほうがいいかもしれない」

古くなったコーヒーの木の手入れ方法を実演。それを見ての、意見交換中。





コミュニティで引き継がれてきた伝統的な手入れ方法

古くなったコーヒーの幹を切り倒し、小枝や葉をその切り株の周辺に盛る。さらにその周辺に浅い堀をつくって、不必要な根っこを絶つ(左)。枝をはらったコーヒーの木にはさっそく鶏たちが集まってきた。ミミズがたくさんいる豊かな土の証拠(右)。せっかく、手入れをしたのだから、コーヒーの木の間に豚のえさになるようなタロイモ類を植えてみては？とグレッグからの提案。



有機堆肥のつくりかたレクチャー

すでに有機堆肥づくりにチャレンジしているメンバーがいたものの、いろいろな改善点も。バーミカルチャーがおすすめ、とすぐ近くのコーヒー畑からミミズをたくさん集めてくるようにアドバイス(左)。分解できないプラスチックや金属はしっかりとりのぞくこと、小枝や木の皮はかならず小さく砕いて入れること、とグレッグ(右)。



土づくりのノウハウも伝授

コミュニティメンバーの畑で、化学肥料や農薬に頼らないで、生産性をあげるための「土づくり」について説明中。手づくりの堆肥以外にも、土のなかに落ち葉を漉き込むことの有効性や、虫がよってこないような植物(コンパニオンプランツ)を近くに植えるアイデアなどを説明。さっそくみんなでも挑戦してみる。





小規模養豚に関するセミナー

エルメラの人たちにとって重要な豚(冠婚葬祭や慣習的なお祭りなど)。しかし現在までその飼育方法はいたって粗放的で、「ケアする」という概念がないに等しいため、成育に長い時間がかかっている。そこで、アンボとグレッグが自分たちのフィリピンでの経験を共有し、大きな資本をかけなくてもコミュニティにあるものを工夫して利用すれば、きちんと成果が出るような飼育方法をレクチャーした。重要なのは、①清潔にすること、②常に飲料水を切らさないこと、③人間と同じように面倒をみること(寒さや暑さに注意)。栄養価の高いエサづくりも実演。

振り返りのミーティング



この一週間で、アンボとグレッグが感じたことをオルター・トレード・ティモール(ATT)スタッフに共有。「農民」として成功するために重要なポイントは①人びとの意思、②土地、③現状を改善していくための知恵、の3点であり、「外部者」である我々は、その3点を「当事者」であるコミュニティの人びとが獲得するサポートしていく必要がある！と強調する2人。



まず、東ティモールの人たちの植民地主義者・侵略者に対する闘いに、心からの敬服を伝えたい。けれども、わたしが今回かいま見ることのできた東ティモールの現状は、とてもショッキングなものだった。もっとも基本的な食料主権が奪われたままであること、それから彼ら自身が「伝統的」と言っている物事の一部がわたしの目には“侵略者によって故意に生み出された/持ち込まれた”ものであるようにうつつたことがその理由だ。

ここの人びとが家族・親族で、強く団結し、協働し、共通の願望を抱いていることはとても素敵だ。と同時に、変化が必要な側面も大きいと感じている。コミュニティの人びとに“伝統的な生活様式”を変えるべきだと言いたくはないし、言うつもりはないが、彼・彼女らが変化するのをサポートする必要があると思う。食料の生産の仕方、食べ方、そして人生の楽しみ方の積極的な変化は受け入れていく必要があるはずだ。

同時に、ここの人びとが変化に対してとてもオープンだということもわかった。たとえば、アフォンソがフィリピン訪問から戻ってまだ2ヶ月弱だが、すでに自分のコミュニティ内でカヤパやネグロスで見てきたことを仲間に説明し、行動に移していた。そして、こちらが伝えることに熱心に耳を傾けていたのが印象的だった。

わたしたちができる唯一のことは、自分たちの経験を共有し、一歩先を行った技術や実践を伝えることだけ。それらを強要することは絶対にできない。だからこそ、彼・彼女たち自身が「変化は必要だ」と理解できるような方法を見つけなくてはいけない。他の誰のためでもない自分たちのため・家族のため・よりよいコミュニティのための変化なんだ、と理解できれば、外部からの助けがなくとも自発的に動き出すだろう。わたしが伝えたいことはそれだけ。

コミュニティ訪問以前は、慣習法の存在なども聞いていたため、先祖代々の食文化を保持している“農民”なのかと考えていた。けれども、それは現状とはかけ離れた認識だったこと、今回訪問した2つのコミュニティでは、人びとは“コーヒー農園で働いている”だけで、“自分たちの食べものを育てている農民”ではないことがわかった。そして、彼ら彼女らの生活・在り方は、コーヒーという産業化された換金作物に頼っていることがはっきり見てとれた。将来的にどのように土地を利用していくのかという点について、彼・彼女たち自身が判断していけるようになるべきだと信じている。

土地問題に関してだが、やるべきことはとても多いと感じた。東ティモールではエスニシティ(民族性)についてそれほど話題にあがってこないことから、自分たちの地域のように「アンセストラル・ドメイン(先祖伝来の土地)」という観点では語れないかもしれないと感じた。もちろんこの人びとも「これは我々の慣習的な土地だ」「先祖から引き継いだ土地だ」とは主張しているが、そのわりに“自分たちが誰であるか”という認識はとても曖昧であるようにうつつた。東ティモールの場合は、単に「農地改革」として土地の権利を主張していくほかないのではないか？

それぞれのコミュニティに関する感想としては、Fitun Caetanoは「貧しい」という印象を受けた。広い土地があるにもかかわらず、遊ばせているだけで有効利用できていないことがその理由だと思う。GATAMIRIについてはもう少し良い状態だったが、逆に土地が非常に限られていて、耕作可能なのは家屋の周辺のみ、あとはすべてコーヒー農園。ただし、グループの強い結束力を感じたので、進歩していく大きなチャンスがあるだろう。もちろんFitun Caetanoも意欲は高く、コミュニティを良くしていくというイニシアチブも感じた。



グレッグ、コーヒーについて学ぶ



エルメラ県で昔から使われている手回しの小型パルパー(果肉除去機)の作り方をグレッグに教えるため、GATAMIRのメンバーがゼロから実演。グレッグはペンとカメラを片手に、詳細を記録。

東ティモールからフィリピンへ「適正技術の移転」だね、と嬉しそうに作業を進めるメンバーたち。



限られた道具と材料を駆使して、作業を進めるGATAMIRのメンバー。“フィリピンの友人のため”と、一週間弱という限られた時間内で1台のパーラーを完成させてくれた。材木はコミュニティ内から、金属部品は廃ドラム缶を利用している。



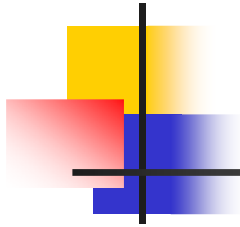
完成したパルパーと一緒に記念撮影。このうち、設計図だけでは再現が難しい中心部の回転パーツがGATAMIRからグレッグに寄贈された。

グレッグからは、帰国後に入った連絡で「すでに1台目をつくりはじめている。これまで原始的な(臼と杵のような)道具しかなかったので、コーヒー生産の質を高めようとがんばっているコミュニティにとって本当に大きな力になるだろう。東ティモールの友人たちに改めて大きな感謝を伝えたい」とメールが入った。

オマケの報告:

グレッグがコーヒーのパルパー製作を学ぶために
GATAMIRに滞在中に、メンバーの1人が飼っている
豚に子どもが5匹生まれた！元気に育ちますように。





この交流プログラムは、公益財団法人トヨタ財団より
2010年度アジア隣人プログラム助成金を受けて実施しています。